

令和元年6月7日現在

機関番号：12606

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K16745

研究課題名（和文）明治～昭和初期の浮世絵・版画により創出された和洋折衷の陰影表現

研究課題名（英文）Shading methods in a Combination of Japanese and Western-styles created by Ukiyo-e and Print in the Meiji period to the Early Period of Showa

研究代表者

松浦 昇 (Matsuura, Noboru)

東京藝術大学・大学院映像研究科・非常勤講師

研究者番号：80640010

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,800,000円

研究成果の概要（和文）：本研究「明治-昭和初期の浮世絵・版画により創出された和洋折衷の陰影表現」は、浮世絵・版画の一次資料調査および文献調査を通じて、明治-昭和初期の日本における新たな陰影表現の成立について調査することが目的である。調査によって、玄治店派と呼ばれる浮世絵師系統の作家が、月夜の表現において使用する陰影表現での西洋水彩画風技法の援用と、固有表現の模索が確認できた。また浮世絵・版画と、西洋画での月夜の逆光表現との違いは、日本の伝統的な陰影表現の技法的連続があると指摘できる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

西洋画との比較において観察される影 (shadow) の省略表現は、日本の描画技法を語る上で注目すべき固有性を持っており、明治以降本格的に導入される西洋陰影法との相違点を調査する学術研究が強く望まれる。本研究では影響力の大きな浮世絵師の系統である玄治店派を中心に、月夜の表現において使用する陰影表現を対象を絞り調査研究を行った。それにより西洋水彩画風技法の援用と、固有表現の模索過程が明らかになった。

研究成果の概要（英文）：Through in-depth research on original resources and documents about Ukiyo-e from the Meiji period to the Early Period of Showa, this research <Shading methods in a Combination of Japanese and Western-styles created by Ukiyo-e and Print in the Meiji period to the Early Period of Showa> aimed to investigate the formation of new shadow expressions in Japan. According to the survey, it has been confirmed that the artists of the Ukiyo-e artist lineage called the Genyadana school use Western watercolor painting techniques in the shadow expression used in the moonlight expression and search for the proper expression. In addition, compared to Ukiyo-e and print, Western paintings have differences in backlit expressions, and it can be pointed out that there is a technical continuity of traditional shading expressions in Japan.

研究分野：映像メディア学

キーワード：浮世絵 陰影法

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

研究代表者による「浮世絵における西洋陰影法の消去に関する基礎研究」(平成 26-27 年度・科学研究費若手研究(B)・研究代表者:松浦昇・研究課題番号 26770066)等において江戸中後期の書画・浮世絵における陰影表現と西洋画の影響について研究を行った。これらの研究結果から要請されたのは、書画・浮世絵で開拓された日本独自の陰影表現が明治以降の表現にどのような影響を与えているのかという観点である。先行研究として、江戸期における浮世絵と陰影法については、岡戸敏幸「『影』と肖像」『日本の美学』第 21 号(1994)、安永幸史「幕末浮世絵における西洋版画の受容について:歌川国芳を中心に」『海港都市研究』第 4 号(2009)、中山創太「歌川国芳研究 - 19 世紀浮世絵における文化交渉のかたち -」関西大学博士論文(2014)などがある。また、日本の影の概念については吉田比呂子『「カゲ」の語史的研究』(1997)が主に言語を対象に論述を行っている。本研究の対象とする時期の浮世絵・版画に対する陰影表現の論考は少なく、明治以降の日本的な陰影表現についての論考が必要と思われた。

また、本研究により日本固有の絵画表現とされる抑制された陰影表現や東洋画全体に通底する平面表現が、いかなる過程を経て現在の日本の絵画や版画・漫画・イラストレーションに引き継がれていったのかという疑問についても、研究の端緒となり得ると考えた。

2. 研究の目的

本研究「明治~昭和初期の浮世絵・版画により創出された和洋折衷の陰影表現」は、明治以降の浮世絵・版画に描かれている陰影表現に着目することで、日本古来の描画表現と西洋絵画の描画表現の折衷表現を整理し直し、新たに生み出された日本固有の陰影表現の発生と、現在の描画表現への影響の端緒を解明することを目的にしている。

3. 研究の方法

(1) 明治~昭和初期を中心にした浮世絵の資料収集と文献調査

明治~昭和初期を中心にした浮世絵・版画の資料と文献を分析し陰影表現の調査を行った。歌川国芳から伊東深水まで師弟関係が続く玄冶店派と呼ばれる作家や小林清親の作品を対象として、陰影表現の分析を行った。一次資料調査としては、ボストン美術館の資料調査を初め、資料所蔵館での閲覧、国内外のアーカイブが公開しているデータベース調査、および二次・三次資料調査のため文献調査を行った。

(2) 西洋におけるジャポニズム以前の陰影法の調査

陰影法を調査する中で、いわゆる西洋的な陰影表現を行う国は歴史的にも西洋文化圏に限られることが分かってきた。西欧的な陰影表現が生まれてきた技法的な経緯を辿りつつ、明治以降の浮世絵に取り入れられるようになる陰影表現の源流を調査し、(3)での調査で技法の比較が可能となる資料を収集した。

(3) 明治以降の浮世絵・版画における陰影表現の変化に関する調査

明治以降は西洋画、写真、印刷技術等により、浮世絵の陰影表現は大きな変化が見られる。「光線画」と呼ばれる浮世絵を描いた小林清親に代表されるように、西洋陰影表現を積極的に取り入れた表現が登場する。こうした陰影表現の変化について、特に月夜の陰影表現を対象を絞り調査・分析を行った。

4. 研究成果

幕末・明治初期において写真術や印刷技術の輸入と共に、メディアとしての浮世絵は変質せざるを得ない状況が訪れることになる。小林清親の「光線画」のように、西洋画の陰影表現を取り入れる作風もあれば、落合芳幾や月岡芳年のように、当時の世相を描いた新聞錦絵での、西洋的な人体描写で浮世絵風に描くという傾向が見られる。また、月岡芳年「月百姿」(1885-92年)には、江戸の錦絵を意識したような表現も混在する。浮世絵全体では明治 30 年代頃から本格的な衰退が始まるが、浮世絵師達は挿絵や日本画などに活路を見いだしていく。こうした西洋画や写真の影響と浮世絵の描画技法の変化を考える上で、もっとも固有性を残す陰影表現に着目している。

本研究では、明治~昭和初期を中心にした浮世絵・版画の資料と文献を分析し陰影表現の調査を行った。歌川国芳から伊東深水まで師弟関係が続く玄冶店派と呼ばれる作家や小林清親の作

品を主な対象として、陰影表現の分析を行った。特に江戸後期から浮世絵において導入される西洋陰影法が、明治時代に入り本格的に描画技法に取り入れられる変化を、表現の変遷や特徴から調査した。描画表現の題材として月夜における影の表現が、最も頻りに扱われる題材であることが、江戸に続き明治期に置いても同様の傾向があった。そのため月夜における陰影表現の変化を玄治店派を中心に分析を行った。また同時期に浮世絵の影響を受けた西洋画における陰影表現の使用法についても分析を行い、日本における西洋陰影表現との折衷表現との比較を行った。

ボストン美術館では鈴木春信「三十六歌仙 源信明朝臣」(1767-68)など錦絵初期の作品から葛飾北斎、歌川国芳、明治～昭和の小林清親「築地明石町寒夜之月」(1929)、川瀬巴水「東京二十景「荒川の月(赤羽)」(1929)、伊東深水「大島十二景之内 雨後」(1937-38)等の作品における月の夜景と影の表現の時代ごとの違いについて、それぞれの代表的な作品の陰影表現から比較を行った。初期の春信には西洋陰影法が使われる作品は少なく、北斎以降に使用例は増えていく。また明治以降では色の表現の方法についても、木版画ながら西洋水彩画のような表現が見られることが観察できた。

また、ハーバード大学ファイン・アーツライブラリー、イェンチンライブラリーでの文献調査や、オンラインデータベースであるハーバード大学のHOLLIS、Japanese Woodblock Print Search等により江戸後期・明治初期の浮世絵等の資料調査を行った。葛飾派の陰影表現や、歌川国芳の弟子筋に当たる玄治店派の陰影表現についても分析を行った。玄治店派は明治期のみならず昭和初期までつながる重要なグループであり、挿絵や日本画への影響も大きい。

明治期の美術における西洋陰影概念の導入について、明治の美術教科書や雑誌論文、新聞等から西洋陰影法に言及する箇所を調査分析した。明治初期において「隈」「暈」「渲」などの江戸以前から使われる用語と西洋陰影法を意味する「陰影」が混在しているが、明治中期以降からは「隈」が使用される頻度は減り、「陰影」や「影」という用語で陰影表現を意味することが多勢となることが観察できた。

西洋におけるジャポニズム以前の陰影法の調査としては、古代ギリシャ・ローマで発明された陰影法が一度完全に下火となり、初期ルネッサンスにおいて再興されるのは過去の研究でも知られているが、現在主流となっている陰影表現が1420年代のファン・エイク兄弟等から始まり、イタリアでは1424年を境に陰影表現が本格的に取り入れられたことを確認できた。Masolino da Panicale「The Annunciation」(c.1423-1424)が最初期の例と思われる。西洋画での月夜の逆光表現は、調査した範囲ではジャポニズム以前の使用例がほぼ確認されず、日本の月夜の表現で多用される月の逆光表現との違いが明らかになった。

本研究は、明治-昭和初期の浮世絵・版画により創出された和洋折衷の陰影表現を対象にしているが、今後の展開として、いわゆる日本的な描画表現とされるような平面的で陰影の限られた描画技法が、現在においてどのような経緯で生み出されたのかを江戸時代からの連続性を技法的に考察することによって明らかにしたいという狙いがある。浮世絵・版画にとどまらず、挿絵や漫画における描画表現を陰影法や平面表現の線の重視などの観点によって考察を発展させていきたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 0 件)

〔学会発表〕(計 2 件)

講演

Noboru Matsuura「浮世絵にはなぜ影がないのか？」Boston Japanese Researchers Forum. The Massachusetts Institute of Technology, Boston. 2019.1.19

口頭発表

Noboru Matsuura「Interpreting Western Methods of Shading in Ukiyo-e Prints」 「浮世絵における西洋陰影法の解釈」The Edwin O. Reischauer Institute of Japanese Studies, Boston. 2019.1.24

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

出願状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

取得状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究分担者

研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：

研究者番号（8桁）：

(2) 研究協力者

研究協力者氏名：

ローマ字氏名：

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。